

ポンド、上値の重い動きが続く

- ◆ポンド、英政治・離脱交渉懸念で上値の重い動きが継続か
- ◆英早期利上げ期待が後退、BOE 総裁は利上げを急がない考えを示唆
- ◆加ドル、早期利上げ期待が支えとなるも原油安が重し

予想レンジ

ポンド円 136.00-144.00 円

加ドル円 80.50 円-85.50 円

6月26日週の展望

ポンドは上値の重い動きが継続するか。英国で来週発表される指標は1-3月期国内総生産（GDP）確報値と経常収支程度で、GDPが改定値と大きく離れない限り、反応は乏しいか。1-3月期 GDP 改定値は前期比で+0.3%、前年比では+2.1%と速報値と一致した。15日の英金融政策委員会（MPC）で利上げ支持が3人に増えたが、英経済が下方スパイラルに陥りつつあるとの懸念も高まりつつある中、イングランド銀行（BOE）は当面、インフレに目をつぶって超緩和的な信用状況を維持せざるを得ない。

BOE内で金融政策をめぐる意見の対立が鮮明となりつつあるが、利上げ支持のフォーブス MPC委員は今月末に任期切れを迎える。その後任としてハモンド英財務相はエコノミストのテンレイロ氏を指名した。テンレイロ氏は賃金・貿易が専門分野で、昨年国民投票前に離脱反対の公開書簡に署名した。同氏はインフレ加速と成長低迷でBOEは難しい舵取りを迫られているとみており、就任当初から利上げを主張する公算は低い。カーニーBOE総裁はまだ利上げを開始すべき時ではないと明言し、国内のインフレ圧力は引き続き弱く賃金の伸びには力がないとして景気の弱さを指摘した。

英国と欧州連合（EU）は今週に離脱をめぐる初会合を行った。英国が強く望んでいるEU単一市場との将来の貿易に関する協議は、「清算金」支払いなど離脱条件交渉の後にするとのEU側の要求を英国が受け入れ、英国がEUに折れる形となった。バルニエ英EU離脱・欧州委員会首席交渉官は「離脱を決めたのは英国であり、私は譲歩するつもりはない」と明言した。同氏は2019年3月のEU離脱決定前に貿易協定で合意することはないとの見解を示した。新たな自由貿易協定を早急に締結したいとの考えを持っているメイ英首相には打撃となった。総選挙でメイ首相の政治的な求心力が低下し、2年間という離脱交渉期間でメイ氏が首相の座にとどまるかどうか懐疑的な見方が強い。

加ドルはカナダ中銀（BOC）の強気姿勢が下支えとなる一方、さえない原油相場が上値を圧迫している。5月のBOC会合では、第2四半期の景気減速やトランプ政権の不透明感などによる先行き経済の不確実性から金融政策の据え置きを決定したが、前週のポロズBOC総裁やウィルキンスBOCの発言は市場にインパクトを与えた。年内利上げ観測もくすぶっており、ファンダメンタルズに一層視線が集まりそうだが、来週は主な経済指標の発表は予定されておらず、値動きは限られるか。米国内の在庫調整が落ち着くまでは原油先物の反発は期待できないとの声も多く、当面は原油安が加ドルの重しに。

6月19日週の回顧

ポンドは上値の重い動き。カーニーBOE総裁が利上げを急がず、EU離脱による経済への影響に懸念を示したことが嫌気され、ポンドドルは4月中旬以来の安値水準となる1.26ドル近辺まで下落し、ポンド円は140円台に押し戻された。加ドルは原油安が重しとなり、やや上値の重い動きとなった。ドル/加ドルは1.33加ドル台まで加ドルが売り戻され、加ドル円は3月下旬以来の高値水準となる84円半ばを頭に伸び悩んだ。（了）